

《オランダ》

1 ミデルブルフ市の概要

ミデルブルフ市は、オランダ西南部にあるジーランド州の州都で人口約4万人の都市である。12世紀に創立された古い都市で、1602年アムステルダムなど5都市とともにオランダ東インド会社を設立した。当時は海外貿易港として栄え、長崎の出島へ向かった船もこの港から出航した。その後、周囲の干拓が進み、現在は運河で外港と結ばれており、オランダ西南部の政治経済の中心地。ジーランド州一体では大規模な干拓が進み、最近では臨海工業が発達している。

第二次世界大戦で戦災を受けたが、市内随所に歴史的遺跡、教会、建物が散在し、歴史と文化の街として訪れる観光客も多い。

2 姉妹都市提携の経緯

出島へ向かったオランダ船の母港。駐日オランダ大使館、長崎駐在オランダ名誉領事を通じて、締結申込みを受け、歴史的つながりをもとにして締結した。

3 ミデルブルフ市主催による歓迎レセプション

参加者約50名（長崎市側31名、ミデルブルフ市側約20名）により、歓迎レセプションが行われた。

＜J. M. ショエナール市長挨拶要旨＞

ミデルブルフは、2030年まで市の主要事業である道路・建物の建設に力を注ぐ予定である。このほか、若者や年配者等、住民のメンタルケアも向上させたい。オランダには各地から移民が増加しており、これも問題である。明日はミデルブルフの黄金期である1600年から1700年代に建造された建物を案内する。17世紀から18世紀には約600隻の船が出島に向かった。ミデルブルフも長崎と同じく、中国や日本との貿易によって発展してきた。また、第二次世界大戦ではどちらも破壊的な被害を受け、この庁舎も1940年の爆撃で破滅した。8月6日と9日に原爆が投下されてから随分たつが、今でも被爆の後遺症に苦しむ人がたくさんいる。オランダ国民も大変なことだと思っている。ミデルブルフは戦争の被害から何とか元の姿に戻ったが、長崎もまた戦争の被害から不死鳥のようによみがえった。しかし、多くの人々の心が傷ついている。長崎もミデルブルフも、自分たちでできる方法で世の中を良くしていこう。

引き続き、プレゼント交換を行い、田上市長の答礼があった。



ミデルブルフ市庁舎



ミデルブルフ市歓迎レセプション

4 ミデルブルフさるく

ミデルブルフ市役所ヴァン・ゲント氏のエスコートで、途中、ショエナール市長と合流し、ミデ

ルブルフ市内の視察を行った。

5 長崎市民による版画展テープカット ～ さよならランチ

参加者約 40 名（長崎市側 31 名、ミデルブルフ市側約 10 名）により、「長崎市民による版画展テープカット ～ さよならランチ」が行われた。

＜田上市長挨拶要旨＞

長崎は鎖国時代、出島を通じてオランダをはじめ諸外国との交流を通じて発展してきた。当時、出島へ向かうオランダ船の母港であったミデルブルフと姉妹都市提携をし、30 周年になる。この間、市民交流や平和モニュメント寄贈、発展途上国支援など多方面の交流が行われてきた。今年は 30 周年記念版画展が今日から開催されるので多くの人に足を運んでもらいたい。また、ミデルブルフ市長には来年開催される平和市長会議へ参加していただきたい。



長崎市民による版画展会場



版画展でのプレゼント贈呈

《フランス》

1 カーン戦争記念館視察及び歓迎セレモニー

参加者約 100 名（長崎市側 31 名、外海町 25 名、カーン市関係者・聴衆約 40 名）により、歓迎セレモニーが行われた。

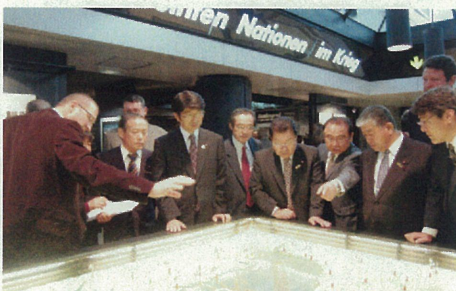
＜デュロン市長挨拶要旨＞

カーン記念館には、長崎の被爆資料が展示されている。永井博士の「戦争には勝者も敗者も無い。あるのは犠牲者のみ」という言葉が印象的である。ヴォスロール村と長崎はド・ロ神父の業績を中心に姉妹都市関係が続いているが、カーンはヴォスロールと協力して友好関係を促進したい。

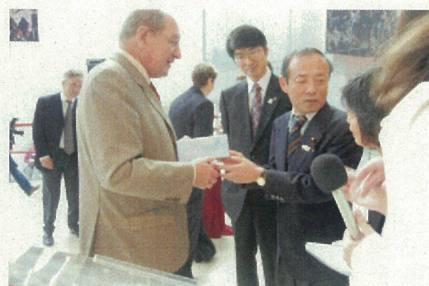
＜田上市長挨拶要旨＞

記念館を見学して、伝えることの大切さを感じた。我々は戦争や原爆の実相を伝え続けなければならない。世界の人たちとつながる大切さもある。原爆資料館への見学者は多国籍である。来年の平和市長会議へカーン市長にも参加していただきたい。住民・市長が平和への思いでつながることが世界平和につながる。私もカーン記念館で見たことを日本・長崎で伝える。

引き続き、プレゼント交換、市長・議長による芳名録署名が行われた。



カーン記念館見学



歓迎セレモニーの様子

2 ヴォスロール村の概要

ヴォスロール村は、パリから西へ 250 kmの距離にあり、フランス北西部のノルマンディー地方中部海岸部に位置しており、村の中をオール川が流れ、「オール川のほとりにある豊かな土地」というのが村の名の由来である。主な産業は、農業及び酪農で、牛乳、バター、チーズ、シードル（リンゴ酒）やカルバドス（リンゴブランディー）の名産地である。

3 姉妹都市提携の経緯

外海地区の人々を救済するため、私財を投げ打って社会福祉事業に貢献したマルコ・マリ・ド・ロ神父の出身地。ド・ロ神父の研究者のヴォスロール村への訪問をきっかけに、旧外海町から提携申し込みの打診をし、ド・ロ神父の人類愛の精神を引き継ぎ、国際平和の促進に役立てようと締結された。2005年1月4日、旧外海町との合併に伴い、長崎市に引き継がれた。

4 ヴォスロール村姉妹都市記念式典

参加者約 100 名（長崎市側 31 名、外海町 25 名、ヴォスロール村関係者約 40 名）の参加者により、姉妹都市記念式典が執り行われた。

＜クロード・ヴェレル名誉村長挨拶要旨＞

ヴォスロール村と外海町との姉妹都市は、合併後、長崎市にひきつがれた。2006年4月、私は当時の長崎市長伊藤一長氏とお会いした。その伊藤前市長が銃弾に倒れたと聞いたとき、大変衝撃を受けました。ここで前伊藤一長市長に敬意を表し、1分間の黙とうを捧げたいと思う。

※「1分間の黙とう」

＜ベノア・デムラン村長挨拶要旨＞

ド・ロ神父で結ばれ、姉妹都市交流を続けていた。姉妹都市交流とは相互理解と世界平和への第一歩である。人口の違いは問題ではなく、今後も心が通い合う姉妹都市交流を続けていきたい。



姉妹都市記念式典
(ド・ロ神父生家前)



姉妹都市提携憲章の確認書署名

＜田上市長挨拶要旨＞

ド・ロ神父は、外海の人々に信仰の大切さを伝え教会を建てただけでなく、教育の場をつくり、女性のために仕事をつくり、農地を広げ、土木工事をし、医療を施すなどさまざまな活躍をされた。しかし、外海の人々に与えた最も大きなものは限りない愛情であったらと思う。その証

抛に、外海には今も人を思いやる気持ちが強く、ド・ロ神父を慕い尊敬する人たちが外海から大勢この式典にやってきた。心のあり方は地域のあり方を変えるだけでなく、世界のあり方を変えることができる。私たちは、ド・ロ神父の出身地として、また原爆の惨禍を体験した街として、人々が平和の中で暮らすことができるよう最善の努力を傾けたい。また、来年開催される平和市長会議へヴォスロール村も参加していただきたい。

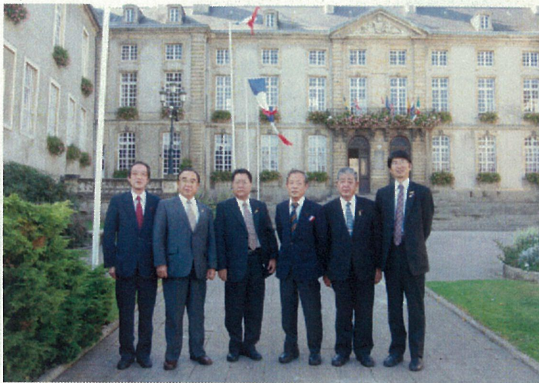
引き続き、姉妹都市憲章の確認書署名、植樹式（リンゴの木3本）、ミニ日本庭園テープカット、平野武光ホール開所式が行われた。

5 バイユー市役所表敬訪問

参加者約 50 名（長崎市側 9 名、バイユー市関係者、ヴォスロール村関係者約 15 名、後刻外海町 25 名参加）で、バイユー市役所表敬訪問を行った。

＜バイユー市第 1 助役挨拶要旨＞

バイユー市は年間 100 万人の観光客が訪れる観光地であり、時間があれば観光をしてほしい。ヴォスロール村とは市町村共同体である。



バイユー市庁舎前



バイユー市表敬訪問

6 ユネスコ パリ本部訪問

ユネスコパリ本部前庭の「長崎の被爆天使像」を視察後、長崎の教会群とキリスト教関連遺産及び九州・山口の近代化産業遺産群の世界遺産登録に向けた今後の取り組みについてのご支援、ご助言をいただくため、松浦事務局長の表敬を行った。



長崎の被爆天使像



松浦事務局長表敬